

「Gastrointestinal Pathology and Its Clinical Implications」

Klaus J. Lewin, Robert H. Riddell, Wilfred M. Weinstein 著

東京大学教授・第1外科

武 藤 徹一郎

大変ユニークな素晴らしい病理の本が出来たものだ。本の表題に“Clinical Implications”と記されているように、本書では実にきめ細かく臨床に気が配られている。著者らも本書を消化器病の教科書の兄弟のように扱ってほしいと序文で述べているが、正にその通り、病理組織の説明のみならず臨床的な事項、標本の取り扱い方、生検の扱い方、意味づけなど、まことに痒い所に手の届く説明がしてある。患者の取り扱い方に多くの紙面が割かれているのも病理の教科書としては異例のことである。病理医はこういう言葉を使っているとはいけない、内視鏡医と病理医の間ではこのようなルールが守られねばならない、など明日から役立つ実地的な注意も忘れられてはいない。疾患によっては病理医の役割という記述があったり、炎症性疾患では生検の読み方が問題集のごとく症例呈示されているのもユニークである。

学会で論争のある点も教科書的にまとめるのではなく、論争点を明確に記したうえで著者らの解釈を述べているのも面白い。わが国のように著者が一方的な解釈を述べるにとどまると違って、読者はよりよく問題点の実態を理解することができるであろう。例えば、潰瘍性大腸炎に

発生した腺腫と dysplasia の違い、腺腫の misplacement 内に生じた癌と浸潤癌との違い、de novo 癌の論争についてなど、まことにホットな問題についてもきちんと説明されている。

更に、本書を際立たせるもう1つの特徴は写真がほとんどすべてカラーであるということである。X線写真、電顕写真を除けば99%以上がカラーで、どの頁を開いても臨場感に満ちている。その数も膨大なもので、一章としては最も短い虫垂の項ですら32頁に66枚のカラー写真が使われていることから他を類推されたい。質に多少の問題があるが、ふんだんに出てくる生検像もすべてカラー写真である。様々なまとめの表が多数掲載されていることも本書の特徴の1つと言える。1,400頁余りという大著をわずか3人で書き上げたのは敬服に値するし、これだけ多数のカラー写真の使用を可能にしたのも、お世辞抜きに出版社の努力なしには考えられない。著者らの生の考え方が直に伝わってくるようで、従来の教科書にはない生き生きとした躍動感が伝わってくる。

本書は2巻からなり、第1巻は4部18章、第2巻は1部9章で構成されている。前者には生検、切除標

本の取り扱い方、消化器全域にわたる疾患(血管病変、内分泌系疾患など)、食道、胃・十二指腸、虫垂が、後者には小腸・大腸が含まれている。章の数は一見少ないが、各章が疾患別に実に細かく分けられており、その詳細を記した分だけで31頁を要するほどなので、ここで全体を紹介することはとてもできない。1例を挙げれば、炎症性腸疾患の章の中には大項目だけで11、中項目を入れると30以上が含まれている。各章における大見出しは青字であり、以下、項目が下がるにしたがって見出しの字体を変えてあるので、読者は必要な所を容易に拾い読みすることができるように工夫されているのも有り難い。

カラー写真と表とスタイルとで十分に視覚的に訴えるだけでなく、内容的にも非常に臨床に即した記述に満ちた本書は、病理医のみならず、内視鏡医、消化器内科医、消化器外科医にとっても有益な教科書となるであろう。座右の書としてお勧めしたい。

●Published by Igaku-Shoin Medical Publishers, Inc., New York, 1992, two-volume set, 1,488 pages, 2,097 full-color photos, 148 black and white photos, 22 line drawings, ¥54,800

医学書院洋書部(☎03-3817-5670~1)